中国語の結果構文の使役化成立条件について

楊　麗　栄

Abstract

Causative structures are important grammatical structures with unique semantic features and syntactic properties. The mechanism making the Chinese causative structures has been of great concern. There are a lot of discussions on the Mechanism of Causative Alternation at the Syntax-Semantics Interface, but little research on the logic of the clauses after the alternation. This paper explores the conditions in which the causative structures can exist from a cognitive perspective.

キーワード……結果構文　使役義　使役主　非使役主　項構造

１．はじめに

中国語において使役の意味はよく介詞によって表現される。使役の意味を示す介詞としてしばしば用いられるものに“使”、“令”、“让”、“叫”がある。なお出典を付していない例文はすべて筆者による作例である。「〰」は使役マーカーを、「＿」は結果複合動詞を表し、「▬」は動作主を表す。

（1）a. 她快让我发疯了。　（私は彼女の行動で狂いそうになった。）
　　b. 那本书使我感动了。（その本は私を感動させた。）　（王玲玲 2002）

（1a-b）は“让”、“使”を使った有標構文である。興味深いことに、“让”や“使”を使わない結果構文も数多く存在する。

（2）a. 他急哭了小王。　（彼は王さんを焦らせて泣かせた。）　（宋文輝 2007）
　　b. 他打破了杯子。　（彼はコップを壊した。）

しかし、使役マーカーの有無に基づいて、使役の意味を表す結果構文が成立するかどうかは判断ができない。

（3）a. 胃的强烈痉挛把她疼醒了。 ＜使役マーカー“把”がある＞
（彼女は胃の強烈な痙攣に苦しみ、目を覚ました。） （宋文輝 2007）
b. *孩子的哭声把她疼醒了。（彼女は子供の泣き声に苦しみ、目を覚ました。）
（4）a. 艰苦的工作累倒了小王。 ＜使役マーカーがない＞
（あまりの仕事の辛さに、王さんは疲れて、倒れてしまった。）
b. *艰苦的工作病倒了小王。（あまりの仕事の辛さに、王さんは病気になって、倒れてしまった。）

（3a）と（4a）は適格な使役義を表す結果構文であるが、（3b）と（4b）不適格文になる。（3a）と（3b）および（4a）と（4b）の構文は同じ構造であるにもかかわらず、（3b）と（4b）が不適格文になるのはなぜであろうか。

さらに、次の文を見てみよう。

（5）你看完这本杂志了吗？（この雑誌を読み終わりましたか。）

（5）は結果構文としては適格であるが、使役の意味が生じないのはなぜであろうか。

本研究は先行研究を批判的に検証し、使役義の概念を再確認したうえで、中国語結果構文の使役化成立条件について考察を試みる。

２．使役義を表す結果構文の範疇

２．１　使役とは

使役の概念に関して、多くの先行研究がある。本節では、使役義の意味を再考する。

使役義に関しては広義（繆錦安 1990 ; 範曉 2000）と狭義（鄧守信 1994 ; 刑欣 2000 ; 何元建、王玲玲 2002）の説がある。

繆錦安（1990）と範曉（2000）は使役義の意味を広義的に分析している。

繆錦安（1990）は“动作如引起动作者以外的参与者变化为使役动作（もしも動作が動作主以外の参加者に変化をもたらしたら、この動作は「使役」の動作である）”と定義する。

範曉（2000）は“作为语法结构的致使结构反映了一种客观事实――某实体发生某种情状（包括动作行为、活动变化、性质状态等）不是自发的，而是受某种致使主体的作用或影响而引发的（文法構造として使役構造は一種の客観的事実を表す。ある実態がある状態（動作行為、活動変化及び性質状態等を含む）になるのが自発的でなく、ある使役の主体の働きかけ、或いは影響を受けてそうなる場合である）”と定義する。

使役義の意味を狭義に捉えている研究は鄧守信（1994）、刑欣（2000）などの研究が挙げられる。鄧守信（1991）は“使成式指明事件 1 与事件 2 中动作的关系（「使成式」は事象 1 と事象 2 の動作の関係をはっきりと表現している）”と定義する[1]。刑欣（2000）は“动词 1 致使、引发、导致另一类动词 2 或状态词的出现，成为动词 1 的结果或由动词 1 引发某种状态（動詞 1 は動詞 2 または状態を表す言葉を出現させ､或いは引き起こす｡動詞 2 は動詞 1 の結果になるか、或いは動詞 1 によるある状態を引き起こす）”と定義する。何元建、王玲玲（2002）は使役構文が使役動詞を含むとする。そして、“句子表示由于此人或此物而致使某种结果（文は人或いはものによって、ある結果を引き起こす）”という。

広義の概念であれ、狭義の概念であれ、「使役」は使役者のある行為によってある事物を変化させるという意味は変わらないと考えられる。これらの研究成果を踏まえると、使役義を表す結果構文の特徴を次のようにまとめることができる。“由动结式所代表的一个完整的致使事件包括这样四个语义要素：致事（致使者）和致使方式，役事（受使者）和致使结果（施春宏 2008）（「動結式」では、完全な使役事象は次の 4 つの語義要素、すなわち使役主、使役方法、被使役主と使役の結果を含む）[2]。”

本節でまとめた使役義の意味に基づき、次節では現代中国語の結果構文の範囲について考察する。

２．２　現代中国語の結果構文の範囲

（6）a. 西风吹黄了树叶。（西風が吹いてきて、葉っぱが黄色くなった。）
　　b. 我教会了她说汉语。（私は彼女に中国語を教え、彼女は中国語が話せるようになった。）
（7）a. 你能看懂日语吗？（あなたは日本語が読めますか。）
　　b. 练了一早上字，手都写累了。（朝ずっと習字をやっていたので、手が疲れた。）
（8）a. 是我把你们吃穷的。（私はたくさん食べるから、あなたたちを貧乏にしたのだ。）
　　b. 她哭得一塌糊涂，脸都哭脏了。（彼女は顔が汚くなるほどにめちゃくちゃに泣いた。）

（6）の“吹黄”は「風が吹いて、葉っぱが黄色くなった」という意味を、“教会”は「相手になにかを教えて、相手はできるようになる」という意味を表す。（7）の“看懂” は「読んでわかる」という意味を、“写累”は「字を書いて疲れる」という意味を表す。（8）の“吃穷”は「食べて相手を貧乏にする」という意味を、“哭脏”は「泣いて、顔を汚くする」という意味を表す。（6）-（8）の動補構造の述語は動作が補語の状態の出現と変化を明らかに引き起こしたことを伝えている。したがって、（6）-（8）の構文は典型的な結果構文と見なす。このような構文は“致使类动结式（causer-causee VRC　使役義を含意する結果構文）”ともいう（施春宏 2008）。

（9）a. 改革开放以来，山东犹如一头睡醒的雄狮，威风凛凛地展现在世人面前。（改革開放以来、山東省は目覚めた雄ライオンのように、威風堂々と世の人の前に現れた。）　（CCL）

b. 您要是再不来，花就开败了。（もし、あなたがまだお見えにならないのなら、花は散ってしまいますよ。）　（冯骥才《雕花烟斗》）

（10）a. 河面慢慢变宽了。（川の幅がだんだん広くなってきた。）

b. 这棵树每年能长高 2 米。（この木は毎年 2 メートル成長することができる。）

（9）の“睡醒”、“开败”は前後ふたつの状態の変化を表している。“睡醒”は「寝て起きる」という意味を、“开败”は「花が咲いて散る」という意味を表す。“睡醒”の“睡”と“醒”、“开败”の“开”と“败”の間ははっきりした境界線はないかもしれないが、動作あるいは状態の前後の順序は決まっている。（10）の“变宽”、“长高”は述語そのものの変化傾向を表す。このような構文は動作主の自然変化の結果を表し、使役義が含意されていないため、“自变类动结式（self-changing VRC 事物自身の変化を表す結果構文）”と呼ばれる（施春宏 2008）。本研究では、使役義が含意する結果構文を中心に研究をするため、使役義を派生させない自変結果構文を研究対象外とする。

（11）你看完这本杂志了吗？（この雑誌を読み終わりましたか。）　（＝（5））

（12）我在农村住久了，来到城里不太习惯。（私は農村に長く住んでいたので、町に来てもあまり慣れない。）　（刘月华他 1991）

（11）における“完”は動作が「完結した」という意味を表すだけで、“看”という動作が人または事物に対してどのような結果を生ぜしめたかということは含意されていない。また、（12）における“久”は“住”という動作を説明するだけであって、使役義が派生していないことがわかる。

さらに、刘月华等（1991）によれば、“大、小、快、慢、肥、瘦、轻、重”などの形容詞が結果補語になる場合は、しばしば「ある基準に合わない」という意味を表す。

（13）今天上课我来晚了。（今日の授業に私は遅刻した。）　（刘月华他 1991）

（14）这件衣服做大了。（この服を作ってもらったが、大きすぎた。）

要するに、（13）の“来晚（了）”、（14）の“做大（了）”は不適当の動作で予想がはずれた結果になったことを意味する。“来晚（了）”は、もともと授業の時間になったら、学校に着かなければならないのに、なんらかの原因で授業に遅れてしまった。また、“做大（了）”は作った

服の大きさは予想した大きさより大きかったことを意味する。

（13）の“晩”と（14）の“大”は述語動作を描写し、その述語動作の付随した結果であることがわかる。これらの結果補語は、表層上は動補構造の形式だけを取り、語義関係を表しているだけで、使役義が含意されていない。このような結果構文は“评述类动结式”（theme-comment VRC）と呼ばれる（施春宏 2008）。本研究では、使役義を派生させない評価結果構文も研究対象外とする。

２．３　使役義を表す結果構文の分類

２．２では中国語の結果構文の範囲を考察した。本節では使役義を表す結果構文を分類する。

通常、使役義を表す結果構文は次の三種類に分けられる。“顕在的使役主（overt causer）”、“隠在的使役主（covert causer）”、“外在的使役主（external causer）”の三種類である。

第一に、“顕在的使役主”とは主語が V から項構造が受け継がれて、使役主になる場合である[3]。

（15）a. 我喝（V）光（R）了水[4]。（私は水を飲み干した。）

b. 孩子（读这种书）读（V）傻（R）了。　（施春宏　2008）

（子供は（この種の本を読んで）頭が悪くなった。）

c. 他走（V）破（R）了三双鞋。（彼は靴を三足も履きつぶした。）

第二に、“隠在的使役主”とは主語が述語 V の被使役主が使役主になる場合である。

（16）a. 这种书把孩子读（V）傻（R）了。　（施春宏　2008）

（この種の本を読んで、子供は頭が悪くなった。）

b. 汉堡包吃（V）坏（R）了他的肚子。（彼はハンバーガーを食べてお腹を壊した。）

c. 股票倒（V）赔（R）了他五万块钱。（株の売買で彼に 5 万円の損をさせた。）

第三に、“外在的使役主”　とは主語が独立に存在していて、V1 からも V2 からも項構造が受け継がれない場合である。

（17）a. 这场饥荒饿（V）死（R）了不少人。（あの飢饉が多くの人を餓死させた。）

（Li,Yafei 1995）

b. 一个美梦笑（V）醒（R）了奶奶。（おばあちゃんはいい夢を見て、笑って起きた。）

c. 突然的海啸冲（V）倒（R）了所有的庄稼。（突然の津波がたくさんの農作物を倒した。）

以上の三種類の使役主はすべて名詞句であるが、動詞句の場合も見られる。

（18）a. 看电视把眼睛看（V）近视（R）了。（テレビを見すぎて、近眼になった。）
b. 吃甜点吃（V）成（R）了个大胖子。（スイーツを食べすぎて、デブになった。）
c. 打字打（V）累（R）了她的手。（文字を打ちすぎて、手が疲れた。）

（18a）-（18c）の例文では、“看”、“吃”、“打”はすべて 2 回現れている。いわゆる“重动句（動詞コピー構文）”である[5]。動詞句が使役主になるのは、動詞コピー構文において、動補動詞の述語から項が受け継がれる場合であり、このとき、動作主は使役主になる場合が多い（施春宏　2008）。図で表すと、次のようになる。

（19）吃甜点　吃（V）成（R）了个大胖子。　（＝（18b））
（述語）
（“吃”から項が受け継がれている）

３．先行研究と問題点

Li,Yafei（1995）

Li,Yafei（1995）は使役化の成立は使役主と結果構文の動詞及び補語の項構造の関係にあると指摘する。

Li,Yafei（1995）は主語名詞句が第一動詞の項構造と無関係である場合には、主語位置にある項は、第二動詞から意味役割を受けない場合に限り、結果複合動詞から「使役主」の意味役割を受けると説明している。

（20）那场饥荒饿死了很多人。（あの飢饉が多くの人を餓死させた。）　（Li,Yafei 1995）

（20）の“那场饥荒饿死了很多人”という文において、“饿”（飢える）と“死”（死ぬ）は 1 項述語である。いずれも文末の目的語“很多人”（多くの人）を指し示している。言い換えると、文頭の主語“那场饥荒”（あの飢饉）は、2 つの述語のいずれの項構造にも関与していない。

しかし、以上の説明では（4b）の例文が容認されないことを説明できない。

（21）a. 艰苦的工作累倒了小王。　（外在的使役主）　（＝（4a））
（あまりの仕事の辛さに、王さんは疲れて、倒れてしまった。）
b. *艰苦的工作病倒了小王。（あまりの仕事の辛さに、王さんは病気になって、倒れてし

まった。）　（＝（4b））

（21a）と（21b）の例文の構造はいずれも Li,Yafei（1995）が主張している構造と同一であるにもかかわらず、（21a）は適格文で、（21b）は不適格文になる。

Li,Yafei（1995）は（21b）が「θ 基準」に違反していると考えている。「θ 基準」は、各項は一つの θ 役割を持ち、各 θ 役割は一つの項に付与されると主張している（中村捷他　1989）[6]。しかし、この案はもはや Li,Yafei（1995）の自説を否定しているに等しい。

したがって、主語は結果構文の述語及び補語との関係から結果構文の使役化成立条件を説明するのは不十分であるということがわかる。

任鷹（2001）

結果構文が使役の意味を持つかどうかは、結果補語の動詞、或いは補語が使役化できるかどうかと関係があると任鷹（2001）は主張する。

（22）a. 老王喝醉了酒。　（王さんは酒を飲んで、酔っぱらった。）　（任鷹 2001）
　　b. 酒喝醉了老王。（お酒で王さんは酔っぱらった。）　（*ibid.*）

任鷹（2001）は（22b）が“酒可以醉人” という言い方があるから、“醉”は使役化していると説明する。しかし、王紅旗（2001）が指摘するように、（22b）には語感の問題があり、（23）のように直さないと、不適格文になる。

（23）一瓶酒就喝醉了老王。（一本の酒が王さんを酔わせた。）

確かに、王紅旗（2001）が指摘するように、（22b）の文は完全に正しくないというわけではないが、適格性が低い。また、使役化できる結果構文の補語は、自由に使役化できるとはかぎらないことがわかる。

（22a）の例文においては、“酒”は疑似目的語であり、“酒”がつかなければ、文の構造は変わるが、意味はほぼ同じように伝わる[7][8]。

（24）老王喝醉了。

しかし、（22b）の使役主“酒”は主語になることができない。それは、“*酒喝（酒は何かを飲む）”という言い方がないからである。したがって、（22b）に“数量词+…+就”を入れることによって、文を容認可能にしている。

陸倹明（1988）は“数量词对某些句法结构起某种制约作用，这首先表现在某些句法组合如果没有数量词就不能成立这一点上（数量詞はある語法構造に制約の作用があり、これはまず、ある統合的な組み合わせは数量詞がなければ成立できない点に現れている）”と指摘する。

“数量词+名+就”の構文の使用によって、不適格な結果構文は適格文になることが多いことは明らかであるが、その理由と使役義の派生メカニズムについては、今後の課題にしたい。

石村広（2011）

石村広（2011）は、中国語結果構文は、「語順」を利用して使役義を表し、2 つの述語が複合化することによって、目的語に対する使役力を強化する意味合いを持つと主張する。

（25）武松打死了老虎。（武松は虎を殴り殺した。）

[武松打老虎]CAUSE[老虎死了]

EVENT 1　　EVENT2

武松 打死了 老虎。

↓ ①語順の逆転による複合化

②使役義の獲得　　（石村広 2011）

上記①の複合現象と②の語彙的使役機能の獲得は、結果述語のヴォイスの転換という観点から互いに連動したものであると捉えられ、現代中国語では、結果述語に該当する語は使役の意味を持っていなくても、補語との結合により、使役義が派生すると石村広（2011）は分析している。しかし、語順の逆転による複合化が結果述語の使役化につながる理由について、石村広（2011）においては何も述べられてはいない。

４．結果構文の使役化成立条件についての考察

結果構文の使役化成立条件について、主に次の 3 つの角度から考察する。

一、物事に対する認知度と習慣性

認知文法では、言語知識は「習慣化した言語ユニットの全目録」と見なされる（中村芳久 2004）。習慣性とは、ある語の百科事典的意味を構成する要素が言語共同体で共有されている程度、つまり、どれだけの人が知っているかということである（籾山洋介 2010）[9]。百科事典的意味の構成要素の中でも、重要性が高いのは、多くの人が知っているもの、つまり、習慣性が高いものであると籾山洋介（2010）は指摘する。

さらに、中村芳久（2004）は十全な認知モデルを形成するには、3 つの側面が必要であると

指摘した。つまり、①私たちの身体を使って対象と直接インタラクトしながら、②私たちの持っている一般的な認知能力や認知プロセスを通して、③さまざまな認知像を形成しているということである。

(26)　a. 胃的强烈痉挛把她疼醒了。　　（外在使役主）　　（＝（3a））
　　（彼女は胃の強烈な痙攣に苦しみ、目を覚ました。）
　　b. *孩子的哭声把她疼醒了。　　（＝（3b））
　　（彼女は子供の泣き声に苦しみ、目を覚ました。）

（26b）の主語“孩子的哭声”は動補構造“疼醒”の述語“疼”、または補語の“醒”から項構造が受け継がれていない。この例文は Li,Yafei（1995）が指摘するように、「θ 基準」に違反しているので、文は不適格になることがわかる。（26a）の主語“胃的强烈痉挛”も同じく、動補構造“疼醒”の述語と補語から項構造が受け継がれていないが、（26a）は適格文になる。これは Li,Yafei（1995）の論説では説明できない。さらに、“疼醒”の“疼”と“醒”自体は使役化できる動詞ではない[10]。したがって、任鷹（2001）の論説も例文（26a）を説明できない。この現象は、上記の認知度と習慣性で説明できる。つまり、“胃的强烈痉挛”は“她”を“疼”にさせ、彼女を目覚めさせた直接の理由になると結びつきやすい。しかし、“她”と“疼”の間には“孩子的哭声”の関連性は非常に低く、“疼（痛い）”ということで“她（彼女）”に影響を及ぼすことは考えにくいのである。

また、次の例文を観察しよう。

（27）a. 冰把水池里的鱼冻住了。　　（氷は池の中の魚を凍らせた。）
　　b. *严寒把水池里的鱼冻住了。　　（寒さは池の中の魚を凍らせた。）

（27b）の“严寒”は確かに“鱼”を凍らせる力がある。しかし、このような力は常識に照らして、“严寒”が“鱼”を凍らせることができることは容易には推論できない。したがって、（27b）は不適格文になることがわかる。それに対して、水は氷点下ではモノを凍らせるものであるという常識に照らして、通常は水が凍って“鱼（魚）”を“冻住（凍らせる）”ことは認識しやすい。ここでは、“冰”の影響力は非常に取り立てられて、人に注意されやすい。したがって、結果構文も使役化になりやすいことがわかる。要するに、動作主と被動作主の関連性が高いほど、その認知像が形成しやすく、動作主が使役主になる可能性も高い。

二、物事に関する具体性

大辞林によれば、具体性とは直接に知覚できる、具体的な形・内容をもっていること。以下

の例を観察してみると、具体性があるものは情報量が大きく、容認度が高くなることがわかる。

（28）a. ？声音撕破了夜空。（声で夜空を劈いた。）
b. 哭声撕破了夜空。（泣き声で夜空を劈いた。）
c. 凄惨的哭声撕破了夜空。（凄惨な声で夜空を劈いた。）

（28a）-（28c）の文は“声音”、“哭声”、“凄惨的哭声”の情報量は順次に大きくなっている。“凄惨的哭声”のほうは文が一番自然で聞き手にわかりやすいものである[11]。

（29）a. ？題把他做惨了。　（彼はぐったりするほどドリルをやった。）
b. 物理題把他做惨了。　（彼はぐったりするほど物理のドリルをやった。）
c. 高三的物理題把他做惨了。　（彼はぐったりするほど高三の物理のドリルをやった。）

（29c）の“高三的物理題”は結果補語“做惨”の述語“做”の非使役主で、補語“惨”から項構造が受け継がれていない。（29a）と（29b）の例文も同じ構造を取っている。この三つの例文構造はいずれも Li,Yafei（1995）の論説に合っているが、容認度は（29c）＞（29b）＞（29a）である。その理由は、“高三的物理題”は“物理題”、また“物理題”は“題”より具体性があり、“他”だけでなく、結果の“惨”との関連性もよりはっきりしていることがわかる。つまり、具体的な対象は抽象的な対象より使役化しやすいことが明らかである。

三、使役主の取り立て部分に対する影響力

Langacker（1987）の認知文法では、言語構造が私たちのもつ一般的な認知能力や認知プロセス、とりわけ際立ちの認知や注目のあり方の反映であると述べている。

（30）a. 哈密瓜把他吃美了。　（彼は気持ちよくメロンを食べた。）　（宋文輝 2007）
b. ？哈密瓜把他吃饱了[12]。（彼はお腹いっぱいメロンを食べた。）　（*ibid.*）

（30b）の“哈密瓜”は“吃饱”の述語“吃”の被使役主であるが、補語“饱”から項構造が受け継がれていない。（30a）の中の“哈密瓜”も同じように補語“美”から項構造が受け継がれていない。（30b）は前後の文がなければ、容認しがたい。しかし、（30a）は誰が読んでも、違和感のない文である。理由としては次のようなものが考えられる。（30b）は使役主と被使役主の関連から誰でも予測可能な結果になる。人間は食べれば通例、「お腹がいっぱいになる」という結果になる。“哈密瓜”の影響力が弱くなってしまうのである。しかし、（30a）は「食べる」ことによって、“美（気持ちがよくなる）”になる可能性は、“饱”よりは少なく、人の印象に残

るはずである。したがって、（30a）の“哈密瓜”はより強く取り立てられて、使役主になりやすいことがわかる。要するに、人は慣れていることには注意力が低く、特別な物事に目を向けやすいことから、文の使役化は成立する可能性が高いことがわかる。

（31）a. 那碗拉面把小张吃撑了。　（張さんはラーメンを食べすぎた。）
　　b. *那碗拉面把小张吃饱了。　（ラーメンを食べて、張さんはお腹がいっぱいになった。）

（31b）の“那碗拉面”は“吃饱”の“吃”の被使役主であって、補語“饱”から項構造を受け継いでいない。同じように、（31a）の“那碗拉面”は“吃撑”の“吃”の被使役主であって、補語“撑”からも項構造を受け継いでいない。この二つの例文の構造は同じであるが、適格性が異なる。この二つの文を観察すると、（31b）の“撑”はマイナスイメージを人に与え、“那碗拉面”は“他”に対する影響力が顕著であり、結果的に文は使役化しやすいのではないかと考えられる。要するに、人間はマイナスイメージのもの、あるいは不利なものに対しては嫌がり、自分に有利なものに対して好む傾向があることから、マイナスイメージを伴うものや、自分に不利なものが文に出てくる場合は、文をより使役化しやすいことが明らかである。

四、使役主と動補構造の述語部分との包摂関係

状態変化事象を表す状態変化動詞と結果句が共起したとき、動詞が含意する意味範疇と包摂関係を持てないときには、修飾限定できないために、意味的不整合によって非文法的な文を産出することになる（井本亮　2009）。（32）-（33）の例文においては、使役主と動補構造の述語部分の共起も同じ制限が課されていると思われる。

（32）a. 整天练习都把他练烦了。（彼は一日中練習したので飽きた。）
　　b. *整天练习都把他跳烦了。（彼は一日中練習したので踊り飽きた。）

（32b）の使役主“整天练习”の“练习”は“跳”との共起は適当ではないと考えられる。その理由は、練習の内容が多種多様で、“跳”は練習の一つであるとしか考えられない。したがって、（32b）は不適格文になる。（32a）の文構造は（32b）とまったく同じであるが、適格文である。

（33）a. 打扫卫生可把他打扫累了。（彼は掃除をして、疲れた。）
　　b. *打扫卫生可把他擦累了。（彼は掃除をして、拭き疲れた。）

同じように、（33b）の“擦累”の“擦”は“打扫卫生”の一つの手段しかないので、その理由（あるいは動作）は結果を表す補語“累”と使役主の“打扫卫生”との意味が不整合になる。

（32）-（33）の例文から、文の使役化は、使役主と動補構造の述語部分との組み合わせが合理的かどうかに大いに関係があることがわかる。

５．まとめ

以上の分析から、結果構文の使役化成立条件がいくつか明らかになった。1. 共有知識に照らし合わせ、動作主が対象に作用、影響を与える程度が大きければ大きいほど、動作主は使役主になる可能性が高い。2. 使役主は取り立て部分に対する影響力が大きいほど、動作主は使役主になりやすい。その中では、特別に目立つものや、人が普段あまり気づかないこと、また嫌悪感が強い構文は使役義が派生しやすい。3. 使役主と動補構造の述語部分との組み合わせが合理的かどうかは文の使役化に大きな影響を与えている。

今後は、結果複合動詞を伴う構文をさらに詳しく分類し、その使役化成立条件を検討していきたい。

＜注＞

1) 王力（1985）は“使成式”を提案した。本研究でいう使成式とは、ある動作・行為が、その対象物に何らかの状態変化を引き起こすという使役の場面状況を表す点に特徴がある。
2) “動結式”は呂叔湘（1980）により提案された。“使成式”は“動結式”の一種である（施春宏 2008）。
3) V は結果補語の述語部分に相当する。
4) R は結果補語の補語部分に相当する。
5) 重動句は動詞コピー構文とも呼ばれる。文中に同じ動詞が重複して現れ、前の動詞には目的語がつき、後ろの動詞には補語がつく構文を指す（重动句是指前后两个动词复现, 前一个动词带宾语后一个动词带补语的句式（朱德熙 1985）。例：他吃西餐吃腻了。（彼は西洋料理を食べて、飽きてしまった。）
6) 生成文法では、動詞が名詞句（項）に「意味役割（thematic role あるいは θ ‐role）」というものを与えると考える。ここでいう意味役割とは、名詞句が文中で果たす役割を指定するもので、例えば、「X が Y を叱った」というような「叱る」を述語とする文は、この X や Y に入る名詞句の制限（叱る行為ができる人間を指す名詞句が現れる必要がある）が満たされなければならない。文が適正に成立するためには、許される文の形式がどうなるのか（つまり、目的語を持つかどうかなど）と、文中に現れる名詞句の性質がどのようなものであるかという、二種類の情報が指定されなければならない。
7) “老王喝醉了酒”の“酒”は動作主の“老王”と疑似目的語“喝”の両方から項が受け継がれている。“老王喝醉了”は動作主“老王”しか項が受け継がれていない。
8) Goldberg（1995）は疑似目的語を伴う結果構文には「限度を超えるほどその行為を行なったという“End-of-scale”と言われる意味制約があると述べている。言い換えれば、“老王喝醉了酒”は酒を飲み過ぎた結果、王さんは酔っぱらった、という含意がある。“老王喝醉了”は酒を飲み過ぎたという意味が必ずしも含意されているわけではないことがわかる。たとえば、“老王只喝了一点儿，就喝醉了（王さんはすこししか飲んでいないのに、酔っぱらった。）”は典型的な例である。影山太郎（1996）は、「この場合、概念構造では、上位事象＋下位事象という形式を取ってはいるものの、意味的な力点は上位事象（行為）のほうにあり、下位事象はむりやりくっ付けたという程度だと思われ、そのため、この種の表現は生産性が低い」と述べている。
9) 「その語から想起される（可能性がある）知識の総体」というように広く捉えるのが妥当です。語のこのような意味を、「百科事典的意味（encyclopedic meaning）」と言う（籾山洋介 2010）。
10) “醒目”という言い方がある。“醒目”とは「目を引く」という意味を表す。これは“醒”の基本的な意味「覚める」から派生した意味であると考えられる。したがって、本研究の使役義が含意する動詞から除外する。
11) 筆者は 32 人のネイティブの方に対してアンケートを取った結果、そのうち a が間違っていると答えた

人は 24 名で、不自然と答えた人は 2 名で、正しいと答えた人は 6 名である。30 人のうち 30 人が、b と c は自然であると答え、そして、c は b より容認度が高いと答えている。

12) 宋文輝（2007）は例文“哈密瓜把他吃饱了。”に不適格文を表示する「*」マークをつけていた。筆者は 40 人のネイティブの方に対してアンケートを取った結果、そのうち自然と答えた人は 10 名、不自然と答えた人は 26 名、間違っていると答えた人は 4 名である。したがって、“哈密瓜把他吃饱了”は不適格文ではなく、容認性が低い文であることがわかる。

＜参考文献＞

王力 1985.《中国现代语法》，北京：商务印书馆。

朱德熙 1985.《语法答问》，北京：商务印书馆。

陆俭明 1988.〈现代汉语中数量词的作用〉，《语法研究和探索(四)》，172 頁。

中村捷・金子義明・菊池朗 1989.『生成文法の基礎』，東京：研究社出版。

吕叔湘 1990.《现代汉语八百词 增订本》，北京：商务印书馆。

缪锦安 1990.《汉语的语义结构和补语形式》，上海：上海外语教育出版社。

刘月华・潘文娱・故韡 1991.『現代中国語文法総覧（下)』，東京：くろしお出版。

邓守信 1991.〈汉语使成式的语义〉，《国外语言学》第 3 期，29‐35 頁。

影山太郎 1996.『動詞意味論：言語と認知の接点』，東京:くろしお出版。

刑欣 2000.〈递系式的框架特点及各成分之间的相互制约〉，《语法研究和探索(10)》，152‐162 頁。

范晓 2000.〈论致使结构〉，《语法研究与探索（10)》，135‐151 頁。

任鹰 2001.〈主宾可换位动结式述语结构分析〉，《中国语文》第 4 期， 320‐328 頁。

王红旗 2001. 〈动结式述补结构在“把”字句和重动句中的分布〉，《语文研究》第一期，4‐11 頁。

何元建・王玲玲 2002.《汉语动结结构》，浙江：浙江教育出版社。

中村芳久 2004.『シリーズ認知言語学入門　＜第 5 巻＞認知文法論Ⅱ』東京：株式会社大修館書店。

宋文辉 2007.《现代汉语动结式的认知研究》，北京：北京大学出版社。

施春宏 2008.《汉语动结式的句法语义研究》，北京：北京语言大学出版社。

井本亮 2009.「日本語結果構文における限定と強制」，『結果構文のタイポロジー』，東京：株式会社つつじ書房。

籾山洋介 2010.『認知言語学入門』，東京：研究社。

Langacker, Ronald W. 1987. *“Foundations of cognitive grammar*, Vol.1.*”* Theoretical prerequisites. Stanford, Calif.: Stanford University Press.

Li, Yafei. 1995. *“The Thematic Hierarchy and Causativity. Natrual Language and Linguistics Theory”* 13.2:255-282.

Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.p.195.

主指導教員（朱継征教授）、副指導教員（大竹芳夫教授・土屋太祐准教授）